

緑 化 通 信

2017
10月25日
(年7回25日発行)
第461号



発行所

一般社団法人 日本植木協会

〒107-0052 東京都港区赤坂6-4-22 三沖ビル3階
TEL.(03) 3586-7361 FAX.(03) 3586-7577
URL: http://www.ueki.or.jp/
E-mail: honbu@ueki.or.jp



購読希望の方は上記宛へお申込み下さい。年間購読料 5,000円

(一社) 日本植木協会 平成29年度 都道府県別緑化樹木 供給可能量調査 結果報告

(二財) 日本緑化センター 理事 瀧 邦 夫 氏

調査結果の概要

平成29年度の供給可能量は46,850万本となり、対28年度比(4,743万本)98.8%と3年続けて僅かずつ減少している。樹種別内訳は、グラウンドカバープランツ(GCP)が最も多く全体のおおむね半数(46.8%)、次にコンテナ樹木がおよそ5分の1の20.7%、3番目に低木常緑樹が20.4%の順となり、第2位を堅持していた低木常緑樹が主にコンテナ樹木にその座を明け渡した(図-1)。露地栽培物のシェアは32.4%に對し、コンテナ樹物のシェアは67.6%、ほぼ3対7となっている。高木供給可能量の針葉樹、常緑広葉樹、落葉広葉樹の内訳は最近5年間に於いて3:5:2の比率で推移している。主な樹種群について種類別の内訳をみると、GCPでは、タマリユウ490万鉢(GCP全体の22.4%)、シバザクラ類290万鉢(同13.2%)、フィリヤプラン107万鉢(同4.9%)の構成となる。コンテナ樹木は、Chamaefilix、フィリフェラ、オーレア、61万鉢(コンテナ樹物のシェアは32.4%)に對し、木全体の6.2%、シャリンバイ56万鉢(同5.8%)、オタフクナンテン50万鉢(同5.1%)が上位を占めている。低木常緑樹ではサツキ417万本(低木常緑樹全体の43.6%)、ヒラドツツジ139万本(同14.5%)、オオムラサキツツジ119万本(同12.5%)が上位3樹種を構成している。なお、GCPのタマリユウは鉢径7.5cm、5芽立の規格の他に、マット栽培による供給(露地約24,500㎡、コンテナ約152,000㎡)も行われている。

29年度の総数は28年度に對し僅か0.8ポイントの減少となり、対28年度比は露地物99.4%に對しコンテナ物98.5%となり、コンテナ物の後退による(図-2)。29年度コンテナ栽培物の対前年度比の内訳は、樹木107.9%、GCP94.8%となっていることから、GCPの停滞が全体の動きに影響している。【需要の動向】建設工事施工統計調査(国土交通省)によると、平成27年度の造園工事完成工事高は4,591億円、前年度に比べ3.7%減少している。このうち、造園工事業種が元請で受注している金額は2,244億円(前年度比7.5%減)で、元請比率は48.9%を占める。元請比率は前年度に比べ2ポイント下降している。完成工事高は平成17年度以降でみると、平成17年度で7千億円台、平成19年度まで5千億円台、平成20年度以降は4千億円台を横這いで推移している。また、平成27年度の元請受注額を発注者別にみると、公共は1,141億円(50.8%)、民間は1,103億円(49.2%)となり、26年度から2年連続で公共が優位となる(図-3)。

なお、造園工事業を含む総合工事業8業種全体で見ると、平成27年度の元請比率は78.3%、公共と民間の比率は30.8%:69.2%となっている。公共工事の全体的状況を、「公共工事前払金保証統計」(北海道・東日本・西日本建設業保証)によ

って検討する。平成28年度の件数は53,813件、前年度に比較し3.5%の増、請負金額は14兆5,395億円、前年度に比べ4.1%増となっている。発注者別では、市区町村が最も大きく件数で48.8%、請負金額で34.8%を占めている。2番目は都道府県が各々39.4%、30.8%となる。地域別には、関東のウェイトが大きく件数で21.0%、請負金額で26.1%を占める。1件当たり請負金額の推移をみると、平成28年度は5,728万円となり、こちらは5年連続増加している。造園植栽工事に結びつきの強い公園および道路工事の請負金額について、道路部門は2年連続の増加、公園部門は5年続けて増加となる。

「建設工事受注動態統計調査(大手50社)」(国土交通省)をもとに、民間の建設・土木工事の動向を把握する。平成28年度の受注高は10兆879億円、民間工事は、不動産業、卸売業、小売業、電気・ガス・熱供給・水道業等が増加したため、前年度比5.1%増加し、6年連続の増勢となっている。

環境緑化識別検定 認定委員会開催

平成29年9月14日協会の議室に於いて認定委員会が開催され、涌井史郎委員長挨拶、大崎理事挨拶後に第11回認定試験、東京12名、愛知30名計42名の試験結果を踏まえて検討を行うと共に濱野周泰教授より解答状況の報告では解答率の低い受験者が数名いる報告に對して大崎理事より受験者輩出企業の意見として社員教育の一環として参加させた意見報告後に、



平成30年度 通常総会開催のご案内

- 開催日 平成30年1月23日(火)
- 会場 ANA クラウンプラザホテル神戸 兵庫県神戸市

図-1 樹種群別の供給可能量(単位:千本・鉢)
[平成29年度:46,850千本・鉢]

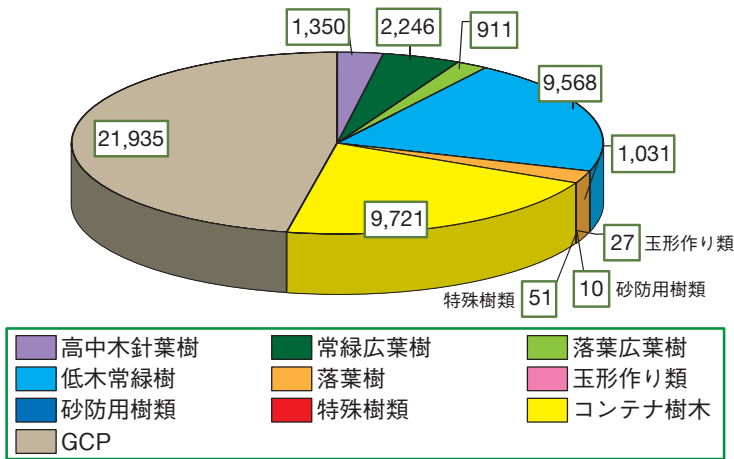


図-2 露地・コンテナ栽培の推移(単位:千本・鉢)

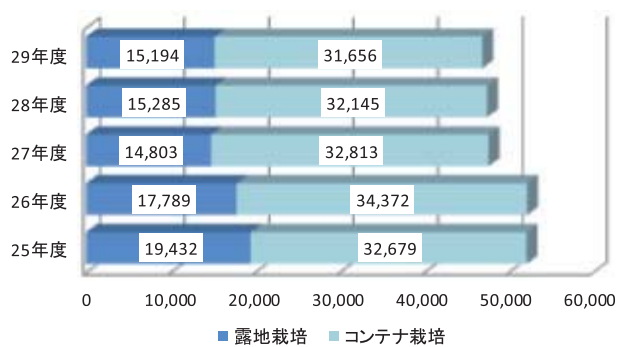
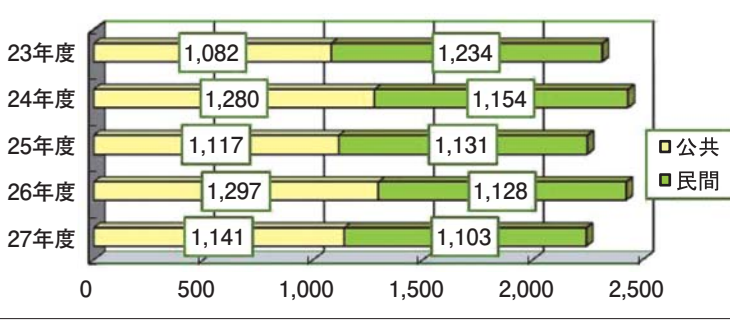


図-3 発注者別元請完成工事高の推移(単位:億円)



両調査会懇談会開催

9月13日協会会議室において、供給可能量調査委員会と(一財)建設物価調査会・(一財)経済調査会との懇談会を開催し意見交換及び業界の現状報告を行った。

議題として、①特に調査結果について輸送コストや人件費上昇が調査で反映が見られない点では、調査回収価格に上昇が見られなかった報告。②両調査会の価格調査協力依頼社数と協力社園数については調査依頼

また、情報交換として、2020年問題や大型工事案件に於ける樹木供給について情報提供を行った。

両調査会からの要望として、各地区からの全樹種価格調査提出社園を多くして欲しいとの要望があった。さらに、9月22日にはコンテナ部会役員と両調査会との懇談



庭園樹部会

平成29年度
通常総会を福島にて開催

平成29年度庭園樹部会通常総会は、会津若松市の丸峰観光ホテルにて、平成29年9月21日(木)17時30分より12名の参加をもって開催された。

通常総会は、小畑副部長による開会宣言により幕を開け、岩田副部長の挨拶に続き、来賓の阪上副会長及び善林担当理事から祝辞を頂いた。

議長には福島県支部の野尻氏が選出され、議事録署名人に兵庫支部の勝山氏と福岡支部の川津氏の2名を指名したのち議事に入った。



第1号議案「平成28年度事業報告と決算・監査報告」については、事務局より各委員活動報告と決算内容報告の後、大村監事より諸帳票類が適切に処理をされており問題がなかったとの監査報告

があり、審議の結果、参加者全員の承認を得た。

第2号議案「平成29年度事業計画案と収支予算案」については、事務局より事業計画と各委員会活動計画及び収支予算案が報告され、審議の結果、参加者全員の承認を得た。

その他に意見等があればと議場に諮ったところ、勉強会や研修会を事業計画通り実施を検討してもらいたい、海外の新しい樹木整枝技術の指導にも部会として取り組むべきではないか、物価版への協力について、庭園樹については無用な価格競争にならないよう我々自らが規格を定める等のことも検討すべきではないか、といった意見が出された。

翌日は総会研修会を開催

ついで討議され、開催地は関東ブロック、開催時期は9月とする事となった。

19時30分より同ホテルにて懇親会が開催された。小畑副部長の開会挨拶に続いて、地元福島を代表して安瀬北海道・東北ブロック長及び野尻顧問より挨拶を頂いた後、阪上副会長の乾杯により宴が始まり、終始和やかに懇談が行われた。



総会会場丸峰観光ホテル

翌21日(金)は12名が参加。ま総合運動公園で見事な加のもと、福島市内のあずちよう並木の視察、江戸時代の宿場の面影を今に残す大内宿の視察、さらには会津若松市内の遠州流名園である白霞庭の視察を行い、研修会を終えた。

植生調査委員会

植生アドバイザー育成講座

今年の植生アドバイザー育成講座は、8月27日(日)

初日のオリエンテーションでは、牛島理事、葛西委員長の挨拶の後、講師の先生方より熱い思いのこもった激励を頂きました。当協会の植生委員会相談役でもある中村幸人先生(元東京農業大学教授)は、国際的な枠組みの中で森林や都市景観などの緑の環境を捉えていく重要性を植生アドバイザーとして養ってほしいこと、また震災復興、災害に強い都市緑化を考えて行く上で植生学が重要になることなどを受講生に語りかけました。

育成講座は、8月27日(日)より3泊4日の行程を群馬県川場村で開催しました。

今日のオリエンテーションでは、牛島理事、葛西委員長の挨拶の後、講師の先生方より熱い思いのこもった激励を頂きました。当協会の植生委員会相談役でもある中村幸人先生(元東京農業大学教授)は、国際的な枠組みの中で森林や都市景観などの緑の環境を捉えていく重要性を植生アドバイザーとして養ってほしいこと、また震災復興、災害に強い都市緑化を考えて行く上で植生学が重要になることなどを受講生に語りかけました。

植生学が重要になることなどを受講生に語りかけました。

系・景観についての理解を深める講義を頂き、植生調査から得られた情報を元に地域の景観を捉える技術と、その目的・必要性を説いて頂きました。実際に川場村10ヶ所程度で調査を行い、森林から田畑に至る植生から目に見える情報として景観を導かれていました。



今年度は、植生アドバイザー育成講座は、8月27日(日)より3泊4日の行程を群馬県川場村で開催しました。

今日のオリエンテーションでは、牛島理事、葛西委員長の挨拶の後、講師の先生方より熱い思いのこもった激励を頂きました。当協会の植生委員会相談役でもある中村幸人先生(元東京農業大学教授)は、国際的な枠組みの中で森林や都市景観などの緑の環境を捉えていく重要性を植生アドバイザーとして養ってほしいこと、また震災復興、災害に強い都市緑化を考えて行く上で植生学が重要になることなどを受講生に語りかけました。

植生学が重要になることなどを受講生に語りかけました。

系・景観についての理解を深める講義を頂き、植生調査から得られた情報を元に地域の景観を捉える技術と、その目的・必要性を説いて頂きました。実際に川場村10ヶ所程度で調査を行い、森林から田畑に至る植生から目に見える情報として景観を導かれていました。

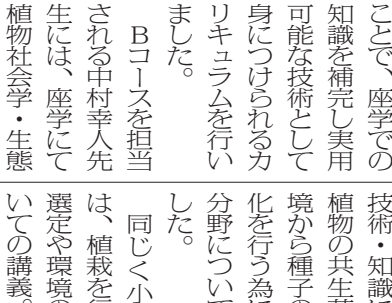
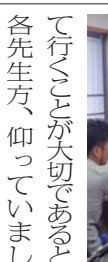


今年度は、植生アドバイザー育成講座は、8月27日(日)より3泊4日の行程を群馬県川場村で開催しました。

今日のオリエンテーションでは、牛島理事、葛西委員長の挨拶の後、講師の先生方より熱い思いのこもった激励を頂きました。当協会の植生委員会相談役でもある中村幸人先生(元東京農業大学教授)は、国際的な枠組みの中で森林や都市景観などの緑の環境を捉えていく重要性を植生アドバイザーとして養ってほしいこと、また震災復興、災害に強い都市緑化を考えて行く上で植生学が重要になることなどを受講生に語りかけました。

植生学が重要になることなどを受講生に語りかけました。

系・景観についての理解を深める講義を頂き、植生調査から得られた情報を元に地域の景観を捉える技術と、その目的・必要性を説いて頂きました。実際に川場村10ヶ所程度で調査を行い、森林から田畑に至る植生から目に見える情報として景観を導かれていました。



今年度は、植生アドバイザー育成講座は、8月27日(日)より3泊4日の行程を群馬県川場村で開催しました。

青年部会
青年部全国研修(京都)

副部長 松居隆史
(松居農園・滋賀県)



平成29年9月14日に、青年部全国研修会を京都で行いました。

天候は絶好の秋晴れの中、参加人数は、青年部員約半数、80人での開催となりました。

当初、今期研修会は、東京豊洲市場での研修を予定していたのですが、みな

さんご存じの通りの現状である為、予定の変更を余儀なくされました。各事業委員は各地域でのプランを出し合いプレゼン形式で開催地を選定し、最終的に京都に決定しました。



天龍寺にて座禅

今回のテーマを「原点回帰」とし、現代の都市緑化の現場では無く、私達、日本人が忘れがちな日本らしい建築や庭、そして、今、京都では空前のホテル建設ラッシュ、外国人観光客を狙った日本らしいホテルが次々とオープンしており、そこに使われている植木の使用事例も見所としました。

また、日々、せわしなく動いている、青年部員の心のケアと禅の呼吸法を学んでもらう為の座禅を天龍寺で、小川治兵衛の作庭と伝えられる国の名勝を見学。指定管理者の植弥加藤造園様による解説も同時に行っていました。



無鄰菴にて

今回の研修を計画し指導のおかげかどうか分かりませんが、30分間部員全員、真摯に座禅に向き合う事が出来ました。意外だったのが、警策(樗の木の手)で肩を叩かれる方が引



切り無しだった事です。部員もたくさん抱えているのだなと思った次第です。また、天龍寺の植栽管理費が年間一億円程度掛かっている事も驚きでした。

締めめの懇親会は、しょうざんリゾート、川床にて京料理を堪能し懇親を深めました。

今回の研修を計画し指導のおかげかどうか分かりませんが、30分間部員全員、真摯に座禅に向き合う事が出来ました。意外だったのが、警策(樗の木の手)で肩を叩かれる方が引

今回の研修を計画し指導のおかげかどうか分かりませんが、30分間部員全員、真摯に座禅に向き合う事が出来ました。意外だったのが、警策(樗の木の手)で肩を叩かれる方が引

今回の研修を計画し指導のおかげかどうか分かりませんが、30分間部員全員、真摯に座禅に向き合う事が出来ました。意外だったのが、警策(樗の木の手)で肩を叩かれる方が引

連載第4回 「植物たちのハーモニー」

桔梗考－凛とした和の美しさ－

景観デザイナー・園芸療法士 槇 島 みどり 氏



大通りを曲がって路地に入ると突然芳しさに包まれた。そう、この幸せな時はお彼岸を過ぎるといつも訪れる。金木犀の香り。知らぬ間に息を大きく吸い込む自分に気が付く。何処から、と見上げると空の雲も夏とは違う。心地よい季節が始まった。

大脳生理学の発達とともに香りがヒトの気分を変え体調も整える（治療する）ことは漸く周知され、かつてトイレ芳香剤を代表する香料として物議をかもしたことなど忘れられようとしている。ほっとする。

そもそも皆が良いニオイと感じたからこそ合成され、それ故のトラブルだったのだから。

もう少し香りを纏っていたいから「雨よ、どうか降らないで」と祈ってしまう。

秋の気配を欲しくて「中秋の名月」の図柄を見ていると七草に目が留まった。山上憶良が花を選んで詠んだといわれる万葉集の2句は（巻八 1537、1538）

秋の野に 咲きたる花を指折りかき数うれば 七種の花
萩の花 尾花 葛花 撫子花 女郎花（姫部志） また 藤袴 朝貌

秋の七草のすらりとした茎は風に揺れしなやかにたわむ。春の七草は息災を願って食す野菜だが、楚々とした姿を備えるこちらの花達はそれぞれに美しい。中でもアサガオ（朝貌）と詠まれているキキョウに魅かれる。アサガオ説以外にムクゲ説やヒルガオ説もあるらしいが、これは是非、桔梗であってほしい。「気品・清楚」という花言葉にも憧れる。憶良はどんなキキョウを愛でていたのだろう。



美しいキキョウ達について最近偶然知る機会があった。魅力的なこの花の教えを受けて、価値を再認識する契機でもあった。

秋の花と決め込んでいたのだけれど、品種によって花期が異なり、主に切り花用とされる早咲きのサミダレ（五月雨）ギキョウは初夏に開花する。それは切り戻してさらに9月以降に再出荷されているらしい。

可憐さと上品さをあわせ持つキキョウは、本来は真夏の花で、耐寒性・耐暑性共にすぐれた丈夫な宿根草。6～10月に山野に自生する姿を初めて目にした人々の驚きは、ヒマラヤの青いケシにも匹敵するほどではなかったろうか。

夏に咲くこの花の人気の300年余前に著された貝原益軒の『花譜』（1694）や伊藤伊兵衛の『花壇地錦抄』（1695）に詳しく、江戸時代から鑑賞用に愛さ

プロフィール
日本女子大学卒業 学術博士
東京農業大学客員教授

色彩や香りなど五感刺激を活かした造園、空間計画を得意とする。ハーブや植物療法の先駆者。身近な園芸から公共施設まで、心地よい空間づくりを幅広く実践している。
<主な作品>
『お台場地区ウォーターフロント』『東京ビッグサイト外構』『リストランテ・ジャルデ

イノ』『山陽道権現湖PA』『国営えちご丘陵公園「暖の館」』『イングリッシュガーデン』『チュニジア大使公邸』『多摩川アートラインプロジェクト』 他
<主な著書>
『ハーブで美しくなる』『ハーブ新来の香草たち』『ボタニカルアートの世界』『ハーブ図鑑110』『ハーブを楽しむ本』『楽しいハーブ入門』『知りたがり屋のハーバルライフ』『Herbal Tea』 他



れてきたことがよくわかる。一こうした江戸の文化に触れるたび、高い美意識と深い教養との差異を思い知らされて、苛立ちはしないけれど焦燥感に襲われるー キリリと美しい星形5弁の馴染み深い花以外の、変化に富んだ色彩と変わり咲きが紹介されている。巻17ー18の草花夏の部には8種ある。高温多湿の時期に、涼し気で清らかな色彩と草姿が時代を超えて求められていたことがわかる。

今夏、猛暑日のある会合の後、「オリンピック・パラリンピックの時、炎天下でヒトも植物もどうするの？どうなるの？」との話題になった。話は沿道を彩る草花や表彰式に手渡されるブーケの内容に及んでキキョウ礼賛へと発展した。近藤三雄氏（東京農業大学名誉教授）は2020年に向けて「真夏に咲く日本らしい花」を当初「ハス」と考えられた。安藤敏夫氏（千葉大学名誉教授）は「真夏に手間をかけずに自然に咲く日本的な花」を目指して3年前からキキョウの晩成種の栽培を手掛けられた。その圃場を訪ね、咲き誇るキキョウを見るや否や近藤先生に反論の余地はなくなったという。集った人々は皆、もちろん納得。

夏に紫系の花はあるものの、赤・黄・オレンジ等の元気な色の園芸種が目立ち、多くが洋花で占められている時にキキョウは正に救世主である。文化的にも歴史的にも生育環境も認知度も、そして品種も開花期もイメージも、何ひとつ不足はない。このバルーンフラワーの海外メディアに説明しやすい要素は他にもそろっている。家紋に多用されてきたこと、桔梗根が古くから薬剤として活用されてきたこと、平安中期の天文学者・安倍晴明との関連や、江戸城の桔梗の間、現存する桔梗門の話も外国人には興味深いはず。

「全てが素晴らしい！」。私は大賛成派に相乗り。日本ので上品なシンボルフラワーでお迎えしたい。
（写真提供 安藤敏夫、文・図版 槇島みどり）



四重



桔梗と藍ぼかし



さるもん一重



萩と格子



しほり

地方かわら版

平井孝幸
（有限会社石正園・東京都）

最近、都内の住宅を見てみると、畳の空間が全くなくなってきた気がします。

日本で一番便利な所に住みながら、我が家に帰ると別荘生活というのが東京の最も理想の生活スタイルだと思ふのです。実際に林の中に入って自然の景色を見てみると、どうでしょう？
雑木どうしが光を求めて熾烈な戦いをしながら光を求めて上部で大きく枝を広げ、当然、下枝は枯れ落ちていく、これが自然の景色でしょう。

3月11日地震の後で、一時流行ったのが、緑のカーテンです。建物の南側大きなネットを張って、ゴーヤ、ヘチマ等を絡めて日陰を作り、節電など言っていました。が、どんな所にも「用と美」が欲しいと思います。最近では壁面緑化もあり、電気力を借りて水を押し上げて落としたりしています。植物は自力でこれが出て来ます。電力に頼る必要はありません。目先だけの変化は、すぐに



せせらぎの水音が穏やかに耳に届きます

飽きられてしまうのに…。日本人が持っている「用と美」の心を深く考えてみたいと思います。
夏の暑い日の木漏れ日や風の音など、ゆったりとした一日を過ごすのも良いではないでしょうか？

暮らしたとともに変わって行く庭。



敷松葉は、冬も明るい景色を楽しめます



「こけ玉」を持って「はい、ポーズ!」

緑育出前授業実行委員会 青年部関東・甲信越ブロックの 多大な協力のもと 植木と土に触れて 「緑育」を伝えた 3年連続「こけ玉づくり」と「木への漢字パズル」 ワークショップを開催



暑い中、半被を着て案内しています

8月26日(土)、27日(日)と連日、東京都江東区、お台場の「夢のプロムナード公園」で開催された「スポーツ&フラワーフェスタ2017」に3年連続で参加し、「こけ玉づくり」と「木への漢字パズル」ワークショップを開催した。緑育出前実行委員会が主体となり、青年部会関東・甲信越ブロックの多大な協力のもと実施した。2日間、生駒委員が早朝から会場準備を行い、3年目となった青年部も手際よく進めることができた。

猛暑の中、加藤委員長自ら協会半被を着て、青年部は熱心に現地でチラシを配り、途切れなく参加者で賑わった。2日間の「こけ玉づくり」の参加人数は、昨年より大幅増の171名にのぼり、「木への漢字パズル」参加者と、そのご家族を合わせると300名程の参加者と予想される。体験後のアンケートでは、「スタッフの対応がとても親切で分かりやすかった」等の内容が多く、「泥だんごが楽しかった」等の意見も聞けた。また、「緑育」という事業を初めて知り、「いい事業ですね」「もっと広めて欲しい」と親御さんから直接の声も聞けたことは、今後の緑育委員会の励みとなりました。植木と土と触れ合うイベントを通じて「緑育」を広めることが出来たと思います。



木への漢字パズルで楽しむ子どもたち



一生懸命、土を丸めています

連載 第4回 都市緑化の価値と意義

日本の伝統園芸文化

東京都市大学環境学部客員教授 博士(デザイン学) 加藤真司氏

プロフィール:

名古屋大学農学部卒業後、建設省(現国土交通省)に入省し、以後主に都市公園の整備を中心としたまちづくり全般に関する行政に関わってきた。その過程で、沖縄の首里城の復元事業や美ら海水族館整備事業、それに国営吉野ヶ里歴史公園の計画策定をはじめとした各種プロジェクトの他、日本の伝統園芸植物の保全手法の研究などに携わってきた。2008年より国立研究開発法人建築研究所にて主に都市緑化に係る研究を進め、2017年4月より東京都市大学環境学部客員教授を務める。博士(デザイン学)。

テレビの時代劇などでは、織田信長や豊臣秀吉がよく登場しますが、彼らが活躍した時代を学校では安土桃山時代と教わりました。ですが、この「桃山」が意味するところを皆さんはご存じでしょうか? そう言う私も長い間知らなかったのですが、実は豊臣秀吉が晩年に居城とした伏見城にちなんで、本来は「安土伏見時代」と称すべきところを、伏見城が桃の名所で有名だったために安土桃山時代と名付けられたようです。語呂を良くしようとしたためなのか、あるいは洒落たつもりだったのかは知りませんが、ただ、「桃山」の命名は時代考証上は正しくはありません。伏見城が桃の名所となったのは、廃城となってから近在の百姓が桃の木を植え始めてからのことであり、それは江戸時代になってからのことです。秀吉は大の椿好きだったようで、大名はこぞって椿の名花を献上し、京都の地蔵院には加藤清正が献上したと伝えられる五色の散り椿の名木が今も残っているほどなので、おそらく伏見城には椿は多く植えられていたはずで



五色の散り椿(地蔵院)



桜(普賢象)

いう象徴的な出来事でした。桜は古くから品種改良が行われていたようで、室町時代の文献には桜の園芸品種である普賢象の名が見られ、現在も東京では竹橋あたりの皇居のお堀沿いにこの普賢象が植えられており、春先に特徴的な花を咲かせます。また、江戸時代の初期には林羅山が今の上野公園のところに百種の桜の品種を植えたとされます。百種というのは多いように思えますが、そのうち7割ほどの品種はすでに確認されているので、決して誇張された数字ではなかったようです。

桜に限らず、日本人は独特な感性で様々な樹種を園芸の対象としました。特に、江戸時代になって太平の世が到来すると、庶民までが園芸に熱を上げることになり、この時代に多くの品種が生まれました。もともと日本人は珍しいものが好きで、しかもはかないものに想いを寄せる一面があるのですが、それ以上に園芸品種の多くが投機の対象として営まれていったために、珍しい品種には多額の値がつけました。このため、敢えて育てるのが難しくて珍しい品種が作出されていき、この結果多くの品種が生まれ、変化朝顔などは原型を留めないほどに奇異な形のもものがもてはやされました。ヨーロッパではより強健で育てやすいものが好まれたこととは対照的なため、イギリスを中心としたヨーロッパの園芸と、中国の宋の時代に興隆を見た中国の園芸と肩を並べて世界三大園芸という人もいるほどです。

海外でも園芸は皇室文化として発達したので文化的なステータスが高く、実際に海外で日本の伝統園芸文化のプレゼンをするとう本当に関心を持ってくれます。近頃は日本を訪れる海外からの観光客が増加していますが、本来は伝統園芸植物の品種だけを集めた植物園が日本にあるべきだと思っています。そうした動きが生じないのは残念でなりません。

都市の緑の整備推進には、緑の量ばかりではなく、その質の向上が重要ですが、日本の伝統園芸文化は緑の質の最たるものだと思います。そういう意味においては生物多様性と同列で評価されるべき事項だと思いますが、しかしながら、生物多様性の専門家からすると、園芸種や外来種は相容れないものとして扱われることが多々あります。園芸・造園技術の立場として、それらを融合した技術の確立こそが重要だと考えています。



変化朝顔(くらしの植物苑にて)



椿(紅ト伴) 京都の霊鑑寺にて



日本列島植木植物園

ナショナルプランツ コレクション*

愛知県・(株)千代田農園 八木 峰夫
☎0587-36-2025

ガマズミ属 *Viburnum*

カンボク *V. opulus* var. *calvescens*

フウリンガマズミ *V. setigerum*

オオカメノキ *V. furcatum*

ヴィブルナムティヌス *V. tinus*

ヤブデマリ *V. pilicatum* var. *tomentosum*

ガマズミ属 (*Viburnum*) は、常緑種と落葉種があり、葉の大きさは、小さい種は1 cm程度、大きい種は、20cm以上になります。

樹高は、1 m程度の低木から、5 mにもなる中高木があります。

花は、3月～6月にかけて、白・ピンクの、テマリ咲・ガク咲の、2 cm～20cmの集合花が咲きます。

9月～11月にかけて、赤・黄・紫・オレンジ色の実をつけます。

チョウジガマズミ (*V. carlesii*) の仲間には、甘く爽やかな香りがします。いろいろな品種があり、多様な用途の植栽工事に使用できます。



カンボク



フウリンガマズミ



オオカメノキ



ヴィブルナムティヌス



ヤブデマリ

*ナショナルプランツ コレクションとは、世界的に価値のある植物の種・品種等を属のレベルで集め、植物の多様性の維持や希少種・絶滅危惧種の保護に役立てる事を目的としたコレクションです。

クビアカツヤカミキリに注意！

樹木医 小林 明氏

外来種のクビアカツヤカミキリ (*Aromia bungii*) による被害が、平成24年に愛知県で初めて確認されて以来、被害が拡大する傾向にあります。このカミキリは、モモやウメなどバラ科の樹木への農業被害や、公共施設などで被害木に発生する落枝や倒伏、また、枯れることで花見に影響するなどの被害を発生させます。本年の8月末時点で成虫が確認された都府県は、愛知県以降、埼玉、群馬、東京、大阪、徳島、栃木、和歌山の1都7県になりました。被害を防ぐには、発見したら直ちに駆除するとともに関係機関に通知することが必要です。以下にこれまで知られていることや東京都内での観察状況を含めて紹介します。

1 クビアカツヤカミキリ (別名：クロジャコウカミキリ)

中国大陸に生息する体長2.5～4 cmのツヤがある黒いカミキリで、名前のとおり首が赤いことが特徴です。別名にあるように、成虫を捕獲するとハスの香りに似た匂いが手に残ります。成虫の発生が多い場合は、匂いがふんわりと感じられるほどです。雄と雌の区別は、触覚が体長より長いのが雄、同じくらいなのが雌です。(写真-1)



写真-1. 交尾中のクビアカツヤカミキリ
この雌は平均より小さい
(2017年7月20日)

侵入経路について、海外の事例では、輸入貨物や木製梱包材に随伴して侵入したという報告があります。

成虫は国内では概ね5月下旬から8月に成虫が発生し、交尾を終えた雌は幹に数百の卵を産み付け、幼虫は木部をかじりながら1～3年を過ごします。かじった部分が幹や枝を一回りするような状況になると枯死や枝枯れが生じます。都内の被害発生地では、胸高の幹径が30cmほどのサクラ類に枯死が見られ、60cm以上の木には枝枯れがあるものの、枯死はしていません。これから枯死するかもしれない、ネットや農薬、誘引剤による防除が行われています。

被害を与える樹木は、バラ科の樹木やカキ、ヤナギ類、コナラなどと伝えられますが、これまでのところ国内では、サクラ類、モモ、ウメなどバラ科の樹木だけです。

2 被害の様子

幹や枝に被害が表れ、それはフラスと呼ばれる糞の特徴的な出方やヤニ（樹皮から出て垂れた樹液）の様子で分かります。被害を受ける部分は、地際から1.5m前後までが大部分ですが、観察例では、高さ4 m前後までフラスやヤニがあります。フラスやヤニは「一見は百聞にしかかず」、写真を参考にしてください。(写真-2)



写真-2. フラス(褐色)と垂れたヤニ
加害が分かりやすい例 (2016年8月17日)

3 防除

主に伐採、農薬使用、ネットの利用の3つの方法があります。(写真-3・4)

もっとも効果が高いのは伐採して焼却か地中深くに埋めることです。この方法は、公園や並木などでの枯れていないサクラ類の場合、住民感情を考慮するとなかなか難しく、また、栽培しているウメやモモもできるだけ果実を採取したいという状況もあって、枯れた木以外は行われていないようです。

植木生産の現場で発見した場合は、ぜひ伐採しての焼却か地中埋設など、木

の中にいる幼虫を出さない処分に取り組んでいただきたいと思います。精魂込めて育てた苗を処分することは忍び難いことですが、総合的にみると最も安価で確実な方法です。

使える農薬には二つのタイプがあります。一つは生物農薬（商品名パイオリサ）です。幅数センチの帯状のマットに天敵の菌類を含ませたもので、クビアカツヤカミキリが触れるとやがて体にカビが発生して死にます。二つ目は、今年適用可能になった噴霧農薬（商品名ロビンフッド）でノズルをフラスが出た穴に入れて樹木内に薬剤を噴霧します。いずれも、幼虫や成虫に触れたり届いたりすることで効果を出しますが、そうでない場合は生き残ることもあり、確実な駆除には細心の注意による作業が必要です。

次に、成虫の拡散を防ぐためのネット設置です。現在使われている合成樹脂製のネットは、食い破られることがあるため、成虫発生期には日々観察して補殺することが大切です。また、より効果を高めるには、地際をしっかりと固定し、数mの高さまで設置することです。農薬とネットの併用が効果を上げていますが、細心の注意とこまめな作業、補殺が欠かせません。



写真-3. ネットによる防除例
研究機関が設置 (2017年6月20日)



写真-4. 白い筋状のものは生物農薬
商品名：パイオリサ (2017年7月7日)

4 被害や成虫を発見した場合

クビアカツヤカミキリによる被害は、フラスやヤニの特徴によってほぼ確実に把握できます。成虫を見つけることが最も確実ですが、フラスやヤニは、成虫より早い時期に発生します。このため、疑わしい場合は最寄りの専門機関あるいは専門家に問い合わせてください。

環境省や国土交通省から自治体などへの通知では、最寄りの環境省地方環境事務所、農林水産省植物防疫所に連絡する旨を記しています。まずは、都道府県の農業試験機関に通知していただきたいと思います。自治体のHPを見ると「成虫は補殺」と記していることがありますが、植木の生産現場で成虫を発見した場合は、補殺後に標本として残しておくことで確実な証拠になります。

なお、環境省では、今年中に「外来生物法」に基づいて「特定外来種」に追加指定する予定です。指定されると生態系への影響を防ぐため、飼養や保管、運搬、放出などが規制されます。

5 次世代に備える

クビアカツヤカミキリの被害に限らず、植栽されたサクラ類や他の樹木には、いずれ病害虫や風雪などによるいわば寿命が訪れます。その時に備えた苗木作りが大切です。筆者が関わっているサクラ類については、東京に住んでいることから「江戸・東京にゆかりのある桜」の中から次世代のサクラ類を提案したことがあります。

他の樹種についても、これまでの経験を評価・反省し、次世代に備える時期かと思っています。例えば、ケヤキは大きな屋敷や社寺では伐採したら売れる苗木を植えていました。公園や街路樹もそんな樹形になる苗木を植えていたら、次に植える費用におつりがくるくらいの価値の木がたくさん育っていたのではないかと思います。そのためには、伐った木の使い道も合わせて考えていく必要があります。あり、大きな課題と考えています。

シリーズ

賛助会員紹介

No.4

(株)タカショー

「ガーデン・エクステリアの ライフスタイルメーカー」

代表取締役社長 高岡 伸夫

株式会社タカショーは、1980年、ガーデンの文化を世界に発信しながら、Heat & Art (やすらぎのある空間づくり) をビジネステーマに、グローバルでハイタッチなガーデン、庭暮らしのライフスタイルメーカーを目指している」と設立されました。戦後から衣・食・住と生活が向上し、家の次には、庭での暮らしがキーワードとなり、家と庭「両方のバランス家庭の暮らし」が大事になると考えてまいりました。

弊社には様々な製品を企画開発・製造していますが、その根底にあるのは、人々が健康に、幸せに暮らすライフスタイルの創造です。住宅内部と外部空間を結び「庭を、リビング、ダイニング、キッチン、ベッドルームに続く5番目の部屋と位置づけた『5th ROOM』、自然の力で省エネや快適性を実現する『SMART LIVING GARDEN』など新たなコンセプトを提案し、様々な価値を生み出しています。

さらに、日本古来からある「離れのある家」のコンセプトを加えた新しい提案『庭ハウス』は、敢えて母

屋から離れた庭の中に新しい空間を提供します。そこでは日常からさらに距離感をも有することで、風が通り、緑で癒され、庭全体を楽しめる、より心地の良いガーデンライフを楽しんでいただけます。

また、近年注目されている商品のひとつに「エバーアートボード」があります。屋外用の化粧建材パネルで、古くなったブロック塀のリフォームや、フェンス、天井まで、壁紙を貼る替えるように簡単に化粧可能で、全80色の豊富なカラーラインアップを揃えています。

海外では中古住宅の流通促進のために、内装をリフォームし、家具を入れ替えて魅力的な住空間を演出することで、中古住宅に住まいを手導く「ホームステージング」という手法が普及しています。日本でもこの

手法が注目される中、タカショーでは、ホームステージングの外側の領域である、庭を演出する「ガーデンステージング」を提唱しています。例えば、ナチュラルテイストを希望される顧客には、天然木による温かみのある屋外家具や、ゆたたりと寛げるウッドデッキ、そして季節の花や緑豊かな樹木で装飾し、庭を演出することで自然な風合いを好む顧客を導く提案ができます。

ガーデンビジネスは住まいだけでなく、暮らしの向上に欠かせない分野になってきております。緑と共に使ってもらうことで、より豊かなライフスタイルになっていきます。特に、街、住まい、オフィスを含め、緑視率という言葉の「緑が人を癒す」ということ大変注目度が上がっており、緑化はますます大事なテーマになっていきます。

最後に、弊社が大事にしているのは、人が未来を作り、すべては人が創る、という言葉であります。どうか私たちの思いを、ご理解いただき、素晴らしい環境と文化型産業に貢献していく企業として成長させていたきたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

庭園療法、芸術療法、森林療法、食育療法、住まい方療法

庭園療法、芸術療法、森林療法、食育療法、住まい方療法

庭園療法、芸術療法、森林療法、食育療法、住まい方療法

庭園療法、芸術療法、森林療法、食育療法、住まい方療法

庭園療法、芸術療法、森林療法、食育療法、住まい方療法

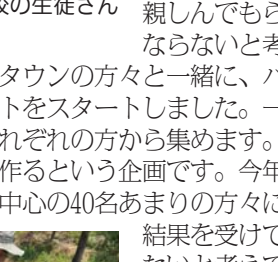
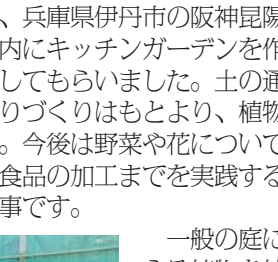
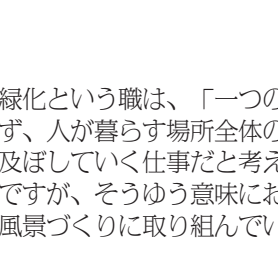
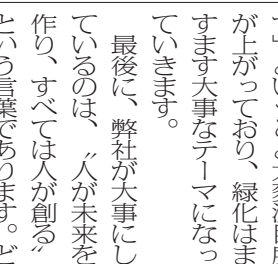
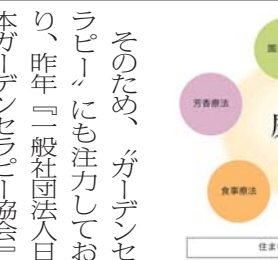
庭園療法、芸術療法、森林療法、食育療法、住まい方療法

庭園療法、芸術療法、森林療法、食育療法、住まい方療法

庭園療法、芸術療法、森林療法、食育療法、住まい方療法

庭園療法、芸術療法、森林療法、食育療法、住まい方療法

庭園療法、芸術療法、森林療法、食育療法、住まい方療法



リレー連載 うえきのちから ～植木が届ける宝物～

食や暮らしの安全への貢献

ひと・杜・暮らし「あまがえる」代表 木下裕文氏

プロフィール

1969年4月30日生まれ。20歳過ぎた頃は劇団に所属し、1999年「あまがえる」造園設計施工業を開始。一級造園技能士、二級建築士を取得。2011年に三田市内に現在の事務所店舗を開く。2017年1月に街路樹サミットin大阪を開催。2017年春には実行委員会のメンバーとともにグループ「まち杜の環」www.machimorinowa.org を作る。(現在一般社団法人化の準備中)

にすることにつながり、そこに植物、もちろん木々を植えるということにつながっていくという期待も持っています。

暮らしの中に小さな農を取り込んでもらうことと同時に、落ち葉や剪定枝葉、刈り草など一般的にはゴミとして扱われ、エネルギーを使って処分されているものを有効に利用することも発信し、実践的取り組みも定期的に行い始めています。その一つは、地域の竹林整備によって得られる竹を粉碎したパウダーを使ったコンポストを講習会によって広めるという活動です。一つは、荒れた竹林を整備するという目的、もう一つは家庭から生じる生ゴミの減量化という目的が主たるものです。

同様に、ゴミとされている落ち葉や刈り草、剪定枝葉も土に還すことができる資材という見方に立って植栽管理をする。自然の循環のサイクルの中に収めていくことを考えなければならないと思っています。そうすることで、人の営みが省け、無駄なエネルギーも抑えられる。私たち自身はあるマンションにおいて、剪定枝葉をその場でチップにして全てを土にマルチングするという管理をしています。ここでは住民の方々にも積極的に管理に参加してもらっています。刈った草や落ち葉もゴミとせず土を覆う資材としてもらっています。

こういった活動は一見地味ですし、時間もかかる。あるいは、ここだけでやってもどうしようもないという諦めるような考えもあるかと思いますが、地道な活動から始めないことには大きな流れも作れないでしょう。

今、日本全国的に農業の担い手は減少し、そのことが里地里山の環境を荒らすことにもつながっていますし、何よりも毎日の食の安全も脅かすことにつながっています。植物を扱う私たちのような職業、業界は環境問題、食の問題、暮らしのあり方に対して大いに貢献できる職種だということを自覚し、啓発、実践活動をしていく使命があると思っています。

使命を全うすれば自ずと業界の道がひらけ、後に続く若い人たちも絶えないはずだと、私は考えています。



これからの時代の造園、緑化という職は、「一つの場所の庭園を作る、緑化をする」という事に留まらず、人が暮らす場所全体の風景や環境を作り、その地域の暮らし方へも影響を及ぼしていく仕事だと考えています。

あくまでも私自身の考えですが、そういう意味において造園が地域の農業、林業などとも一緒になって風景づくりに取り組んでいくべきだとも思っています。

最近の取り組みとしては、兵庫県伊丹市の阪神昆陽特別支援学校の生徒さんたちとともに、学校の敷地内にキッチンガーデンを作りました。ここでは、自然農の農家さんにも協力をしてもらいました。土の通気水脈改善作業から、地域の石を使った花壇の縁取りづくりはもとより、植物の定植を生徒さんの手によって行ってもらいました。今後は野菜や花については種取りから苗づくり、定植、栽培、収穫、そして食品の加工までを実践する場に使い、食そのもののあり方を学んでいくという事です。



伊丹市の阪神昆陽特別支援学校の生徒さんたちと学校菜園作り

この6月には都会やニュータウンの方々と一緒に、バググ型のプランターで大豆を作るというプロジェクトをスタートしました。一株ずつ育ててもらい、秋になると一旦できた豆をそれぞれの方から集めます。それと、農家さんから提供された豆を混ぜて味噌を作るという企画です。今年は実験的な意味も含めてのスタートで、身近なの方々中心の40名あまりの方々に参加していただき、その



大豆作りから味噌作り講習会

一般の庭においても、生活の中で使える植物を植えることが増えました。また、家庭菜園を作ることも増えており、その場所でご家庭が作業をする中で休憩する場所として木陰をもたらず高木を提案しています。

大阪や阪神間の都心部においては、なかなか木々を植える場所を取ることが少なくなってきたと言えます。そこで、そういう地域向けにはまず土に親しんでもらうことから始めなければならないと考えます。そういう目的でこの6月には都会やニュータウンの方々と一緒に、バググ型のプランターで大豆を作るというプロジェクトをスタートしました。一株ずつ育ててもらい、秋になると一旦できた豆をそれぞれの方から集めます。それと、農家さんから提供された豆を混ぜて味噌を作るという企画です。今年は実験的な意味も含めてのスタートで、身近なの方々中心の40名あまりの方々に参加していただき、その結果を受けて来年には参加者を増やしたいと考えています。ゆくゆくは小学校や幼稚園のお子様にも親子で輪に加わってもらいたい、そして、土や植物に大いに親しんでもらいたいと思っています。

身近なところで作物を育てる経験は、ひいては地域の豊や環境に少しでも心を寄せることにつながる。そして、それが敷地内や街の中の土を大切



石巻復興の森づくり

植樹祭2017参加

佐々木 理史

（小岩井農牧株式会社・岩手県）

平成29年9月23日、石巻の「復興の森づくり植樹祭2017」に協会から栄倉会長、菅理事をはじめ、17名が参加しました。

石巻南浜復興記念公園は、東北三か所で計画されている公園のひとつで南浜・雲雀野・門脇（南浜地区）の跡地に計画されている記念公園です。犠牲者の追悼・鎮魂、被災の実情と教訓、復興の象徴、避難場所となる高台などの役割が与えられています。

石巻の計画区域は東日本大震災による津波と火災で甚大なる被害を受け、多くの方が犠牲となっていました。現場でもあります。現地に立つてみると、海からの風と潮の匂いで海との距離が近く感じられました。震災前に立っていた住宅の基礎が所々に残っており、多くの建物があったであろう土地は、今平地になって奥の高台からは堤防の方まで見渡せます。元々水がたま

た「東日本大震災の復興に利用できる樹種」も大いに役立てて貰えたようです。

各ブロック内部では、植える配置が樹種ごとに決まっており、スムーズに配置が出来るよう位置出しの際に目串を色分けして対処しました。私の

作業したA-12区は「落葉広葉樹林」タイプで、植栽の外周部にコゴメウツギ・ミズキ等、中心部にヒサカキ・モミ等、全域にイヌシデ・ウワミズザクラなどを散らばせて配置する計画です。この細やかな配置は自然な植生を目指し、遷移が進んだ

森の将来像を見据えた植樹祭の要となる部分でした。

実際の下準備は、位置出しで混乱したり、細かい苗木の配置数量で戸惑ったりしましたが、その都度コミ

ュニケーションを取りながら何とか乗り越えることが出来ました。植栽地盤である山砂の締固めがきつく、竹串も刺さらないのでかけ

やでなんとか差し込みました。この状況では植栽が難しく、急遽各位位置出し場所

の地盤をほぐす作業を追加しました。植樹祭前日（私は仕事で参加できませんでしたが）無事作業を終え、よい植樹祭です。

当日は天候にも恵まれ500人前後のボランティアの方々と一緒に作業となります。多くは地元石巻の方で、元々この地域に住んでいた方や、久しぶりに帰ってきた人もいてお祭りの



様でした。こんな風に植樹祭を地元の人々が楽しみながら行えば、地域住民と公園とのつながりが続いていくんだと思う良い一日でした。

普段一緒に作業しない人達と協働するのは難しいことも多いですが、刺激を受けたり、新しい知識を得ることが出来ます。植木協会として外部と関わっていく活動は、植物生産者としての社会的責任を、より果たしていく事につながる価値ある活動です。

最後に植樹祭の窓口となってくれた方々は、調整や交渉事など仕事も多く大変だったと思います。お疲れ様でした。公園の建設は続きますし杜づくりも続いていきます。今後も息の長い活動が出来るよう連携していければ良いと思います。ありがとうございました。

連載 第2回 植木カルチャーショック

ウィンターガーデン

東京農業大学 地域環境科学部 准教授・グリーンアカデミー主任講師 大出英子氏



今年は、いつの間にか夏が終わり、いつの間にか秋になってしまった感がありますが、このままいつの間にか冬になっていたりするのでしょうか。

冬になると日が極端に短くなり、曇りがちの暗いお天気が続くイギリスでは、冬ならではの植物の色や姿を庭に取り入れた「ウィンターガーデン」を楽しみます。

「ウィンターガーデン」と聞いて、もしかしたら、「冬のイギリスの庭を見たけれど、単なる冬の庭景色で何の変哲もない庭だったぞ。」と思われたかもしれませんね。日本人の眼で見ると、もしかしたら、単なる冬枯れた植物に覆われた庭のようにしか見えないかもしれないのですが、よく見てみると、そこには計算された技と、何の変哲もない景色に喜びを見出すイギリス人の庭への愛情を見て取ることができるのです。

ウィンターガーデンを構成する主な要素は、

- ・落葉後の枝や幹の色が美しい落葉性木本
- ・冬でも花や紅葉を楽しめるエリカやカルーナなどのヒース類
- ・冬枯れの穂や葉を楽しむ草本類
- ・冬に花を咲かせたり、鮮やかな色の実をつける草本や木本



写真2：シロツグカエデの赤い枝



写真1：赤い新梢が美しいサングミズキ（ベス・チャーター・ガーデン）

・冬でも緑を保つ常緑性の草本や木本などのウィンタープランツと呼ばれる植物と、それらに降りた霜や降り積もった雪、それに加えて、種や実をついはむ季節の鳥、なのですが、それらには各々の特徴をよりよく見せるための手間が、見えないところでかけられているのです。

それらの中で、最も時間がかかっているのが、枝や幹の色が美しい落葉木本をより美しく見せるための剪定です。植物としては、赤い新梢が美しいサングミズキ（写真1）やカエデ類（写真2・3）、白やピンクのキイチゴ類（写真4）、黄色のヤナギ属のサリックス・アルバなどがよく使われるのですが、ここで注意したいのが、これらが「新梢の色が美しい」樹種で、旧枝になると新梢の美

しい色が失われていくことです。そこで、長く美しい新梢を冬に見られるようにと、計画的に強剪定をして意図的にシュートを出させるのです。鉢花生産農家に生まれ育った私にとって、剪定は花数や枝数を増やし、姿をコンパクトにまとめるために行うもので、シュートは出さないもの。シュートを出すために剪定し、しかも冬の景色のために行うなんて、と、それまでの自分の常識が覆る衝撃でした。

また、冬枯れた宿根草や一年草の花穂や葉を残し、そこに降りた霜までも「ウィンターガーデン」として見ることに驚きました。私が、冬は乾燥し冷たい風が吹く栃木の出身だからでしょうか、冬の枯草は火事を防ぐためにも刈り払うのが当然でしたし、庭に残っていればみっともないと言われていました。私にとって、冬枯れた草や花殻は美しくないものだったのです。皆さんにとってはいかがでしょうか？イギリスの場合、冬は曇りがちで湿っており、冬芝は青々と茂っています。枯れた草の色も、芝との色のコントラストで美しく映えます。そんな違いもありますが、今年の冬は庭の一部の枯草を残し、朝早くの庭を観察してみてください。もしかしたら、枯穂や枯葉に降りた霜が、ダイヤモンドの粉を降りかけたかのようにキラキラ光って見えるかもしれませんよ。



写真3：地際で剪定あるいは接いで、枝の觀賞性を高めたシロツグカエデ



写真4：赤や黄色、オレンジ、白などの異なる色のウィンタープランツに彩られた冬の池（ベス・チャーター・ガーデン）。遠くに白く見えるのがキイチゴの仲間のルプス・コックブルニアス

◆プロフィール

栃木県都賀町（現・栃木市）生まれ。東京農業大学農学科卒業後、英国王立園芸協会、（株）タキ種苗、東京農業大学大学院（造園学修士）、（株）大林組などで、幅広く植物に関わった後、目白大学短期大学部准教授を経て、現在は、東京農業大学グリーンアカデミー主任講師（地域環境科学部准教授）。NHK「趣味の園芸」、老人ホーム、実家の「栃木植物園大柿花山」などでも講師として園芸普及活動中。「ベス・チャーター 奇跡の庭」（清流出版）、「はじめてでもできる庭木・花木の育て方と手入れ」（大泉書店）などを監修。

